

2-2 清国陸軍学生と陸地測量部修技所： 日中間における測量技術の移転について

渡辺理絵（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）

陸軍陸地測量部修技所は、明治 21(1888)年、測量技術者育成のために設置された日本陸軍の教育機関である。修技所は、明治末期から清国陸軍留学生を受け入れていたことは日本のみならず、中国においても知られている（『中国測繪史』1995 など）。しかし、修技所へ入学した経緯や母国での役割などについては、いまだ十分な検討がなされていない。

このような中、発表者は陸軍修技所在学生を撮影した写真を入手した。これらは、中国人留学生を中心に撮影され、写真裏に

は彼らの氏名が記載されている。

本研究は、これらの写真から得られた知見を報告するとともに、日中間で展開した近代地図作製をめぐる技術移転について検討することを目的とする。

修技所へ進学した清国留学生は、3年の測量教育を受けた。修技所への留学は、明治 37(1904)年から開始され、辛亥革命の起こった明治 44(1911)年まで、8年間継続した。その間の入学者数は総計 132名とされている。これら留学生の氏名について、第 3・4 期生は入手した写真より、さらに第



写真 1 第 3 期清国陸軍学生 明治 41(1908)年

5 期生に関してはアジア歴史資料センターがネット上で公開している陸軍の修技所卒業生名簿(「大日記乙輯」)より抽出した。次に修技所卒業後の彼らの動向について追跡調査した。

写真1の下方には、「明治四十一年十二月陸地測量部第三期清国留学生卒業記念」と記され、第3期中国人留学生を写していることがわかる。修技所の教官とともに中国人留学生の姿が確認できる。写真1の裏に

も含まれている。写真2は第4期留学生を写している。写真の裏側には「明治四十三年(宣統元年)八月二十五日信州上諏訪に於て 第四期留学生ト共ニ写ス」と記載され、上諏訪で撮影されたことがわかる。留学生は各自スケッチブックなどを手にしており、測量実習中あるいは当時長野地方で進められていた五万分の一基本測図の作業過程であったと考えられる。写真3は、同じく第4期留学生を撮影した集合写真であ



写真2 第4期清国陸軍学生(明治43(1910)年)上諏訪にて

は、彼らの氏名が記載され、それによれば下段は邦人測量師6名および幹事、講師が座している。中段および上段の学生服を着している者が中国人留学生である。彼らの中には、のちに中国中央陸軍測量学校の校長となる李蕃や同校の教育長となる劉器鈞

る。写真下方に「明治四十三年陸地測量部第四期留学生卒業記念」と記され、写真裏には全員の氏名および職掌が確認できる。それによれば最前段中央には、陸地測量部長の大久保徳明を挟んで右側に中国陸軍学生監督の姜思治および左側に廬紹鴻が位

置し、その他は製図科長や地形科長、事務官などの要人が座している。二段目から三段目は製図科や地形科の測量手や測量師が位置し、三段目から最上段にかけて学生服を着している彼らが中国人留学生である。

最上段右から2人目に位置する黄郭は、1880年浙江省で生まれ、1904年浙江武備学堂に首席で入学、翌年、留日陸軍学生として浙江省から派遣を命じられた。はじめ東京の振武学校に入学し、同校では蒋介石と同学になっている。このうち数学が得意であった黄は、陸軍陸地測量部地形科に編入し、1910年、第4期生として卒業を迎える。母国帰還後、清国政府の軍諮府測量部地形科科員となるものの、辛亥革命が起こると上海に赴き、上海軍第2師師長に任命されている。翌年、南京政府が成立すると江蘇

都督府参謀長に指名され、その後、ワシントン会議中国代表団顧問や国民政府委員兼外交部長など国家的要職を兼任する。

3段目右から3人目の俞應麓も黄と同じく陸地測量部修技所の第4期生である。1878年江西省で生まれた俞は、少年時代、私塾で学び中学堂に進学する。1903年江西省武備学堂に進学し、2年後同省からの選抜で官費留学生として日本の振武学校に進む。その後、陸地測量部修技所第4期生として三角科へ進学。同じ頃、静岡の旅館店員と結婚し男児をもうけている。家族を残し単身帰国した俞は、江西省の測繪学堂学監となり、同校の学堂改組に尽力する。1912年以降は、近代地図作製や測地事業の職からは離れ、都督府の軍務部長および軍政司長などを兼任し、晩年には都督府軍事会議



写真3 第4期清国陸軍学生(明治43(1910)年)

最上段右から2人目が黄郭、3段目右から3人目が俞應麓

特派員や江西討袁軍司令部總監といった軍部の中核的な任務に奉職している。

修技所留学生の中には、帰国後、中央陸軍測量学校校長や山西陸軍測量局局長、江西省測量局三角科科長などに就任している者がおり、中国における近代測量教育および測量事業の中心的な役割を担ったことがわかる。また、上海陸軍参謀といった国家的要職に就いた者もいた。

留学生受け入れは、明治44(1911)年入学の第8期生で停止しているが、辛亥革命が起きた同年には、残る在对学生に対しても修業期間を残しながら退学が命じられている。このため、修技所への測量留学は8年という非常に短期間のうちに終了した。

ところで、同じ頃、日本から清国へ渡って各種技術を教授していた「日本人教習」が少なくなかった。その中には、測量技術教習も含まれ、清国の要請に基づいて、明治39(1906)年から広東省・四川省・江蘇省などの測量学校に招聘されている。この時期は、中国の測量学校がようやく全国的に整備され始めた時期であった。

以上から、日中間において、清国学生の修技所への留学、さらに中国へ渡っての測量教習といったかたちで1900年初頭、近代地図作製を前提とした測量技術の移転が非常に短期間のうちに行われたことが判明する。興味深いことに、辛亥革命後の中国では、日本の地形図(管見では明治33年図式)と酷似した地図が作製されている。

以上のような交流が日中間で展開した反面、日本軍は中国において秘密測量を行っていた。明治27(1894)年以降、非合法的な測量が実施されたことは『外邦測量沿革史』などからうかがい知り得る。今後は、こう

した二面性を考慮しつつ、さらに地図の作製と利用をめぐる中国と日本の関係について検討したい。

文献

小林共明(1984)「初期の中国対日留学生派遣について - 戊戌政変を中心として - 」辛亥革命研究4, 1-16頁.

小林共明(1985)「振武学校と留日清国陸軍学生」(辛亥革命研究会編『中国近現代史論集 - 菊池貴晴先生追悼論集』汲古書院) 277-309頁.

参謀本部北支那方面軍司令部編(1979)『外邦測量沿革史: 草稿』ユニコンエンタプライズ.

高木菊三郎(1961)『明治以後日本が作った東亜地図の科学的妥当性について』私家版. 中国測繪史編輯委員会編(1995)『中国測繪史』中国測繪出版社.

黄福慶(1975)『清末留日学生』中央研究院近代史研究所.

山田辰雄編(1995)『近代中国人名辞典』霞山会, 298~300頁.

陸地測量部編(1948)『陸地測量部沿革誌』陸軍参謀本部陸地測量部.

JACAR(アジア歴史資料センター)「清国陸軍学生卒業の件」(大日記乙輯 明治44年) Rf. C02031421800.

Howard L. Boorman, Richard C. Howard, editor. (1968): *Biographical Dictionary of Republican China*, New York: Columbia University Press, pp187-192.